

絵画製作における描画指導について（その1）

○栗井 武子，山川 美由紀
（財団法人幼児研究所 高松幼稚園）

1. はじめに

楽しく、自由に、のびのびと絵画製作活動に取り組んでいる幼児を見るのは、実にうれしいことである。描画から受ける幼児の感動した心は、そののびのびとした動きのある線から伝わって来る。幼児の描画は、本来イメージ画を主として形成されており、出来れば感情のままに、自由にのびのびと描いてほしい。しかし、いくらイメージ画といっても、描画段階をイメージの具象化ととらえると、そこには、やはりある程度の技術も要求されるのではないだろうか。現に、日々の保育の中で、〇〇を描きたいけれど、どう描けばよいのか見当がつかず描画離れを起こしかけている者、反対に、きっかけを与えられたことにより意欲的に取り組み始めた者も見られる。そこで、今回は単に技術向上を求めるのではなく、その技術を足がかりにして思うままにイメージを表現出来る様になるかもしれない。また、技術指導の影響を受け、それを応用し頭の中に描いたイメージを幼児なりにデフォルメしながら、更にのびやかな線が描ける様になるかもしれない。という観点から、物の実体を的確にとらえる目を養う為にフロッキーを、また、イメージの広がりを助ける為に物語を聞いて絵を描く、という二つの指導を試み、描画に表われる変容を観察してみることにした。

2. 方法

a. 期間及び回数 昭和57年5月～昭和58年2月
1ヶ月に約2回

b. 対象 高松幼稚園児

・フロッキーグループ

5歳児78名，4歳児61名，3歳児70名

・物語の絵グループ

5歳児76名，4歳児61名，3歳児50名

c. 材料 鉛筆2B，または、竹ペンと墨汁

B5判更紙，または、 $\frac{1}{6}$ 切画用紙

d. 題材

・フロッキーについて モデルを一人出し、観察しながら描く。助言としては、用具の使用方法、顔の様子、体全体のバランス、体の各部と胴体とのつながり等について話した。5歳児には、洋服のしわ、顔の表情等についても話し、出来上がった作品について評価した。

・物語の絵について 「日本昔話」をカセットテープで聞かせる。

物語：豆つぶコロコロ，桃太郎，カチカチ山，他，計10話

助言としては、よく話を聞かせ、理解しにくい言葉や物についての説明、あら筋及び印象に残った場面についての話し合い、登場人物や風景及び状況についての話し合い等をし、出来上がった作品の説明を聞き、提出させた。

3. 結果及び考察

a. フロッキーについて

3歳児；初めは鉛筆の持ち方も十分でなく、ふらふらした線で顔のみをやっと描く、それも眉がなかったり鼻がなかったりであったが、顔には何があるか、人体には何があるか話しているうちに、手足がはえ、指を描いたり頭髪を細かく描いたりする者も出て来た。すなわち、次第に人間らしく描く様になってきたと言えるが、まだ、印象で描き、観察して描いているとは言えない様である。

4歳児；モデルを見ても、頭部のみを描く者が多かったが、言葉かけをすることにより体全体を描く者が増えてきた。しかし、手足のつり合いまで考えて描ける者は多くはいない。関節の曲がり具合についても、曲げようと努力はしているものの、まだ無理がある様である。

5歳児；体全体のつり合いを考えて描けず、頭部を大きく描く者が多かったが、次第に胴の大きさも全体のつり合いを考えて調節しながら描く様になった。細部についてもよく観察する様になり、洋服の細かいしわまでも表現しようと試みる者も出て来た。



57.6.19



58.2.7

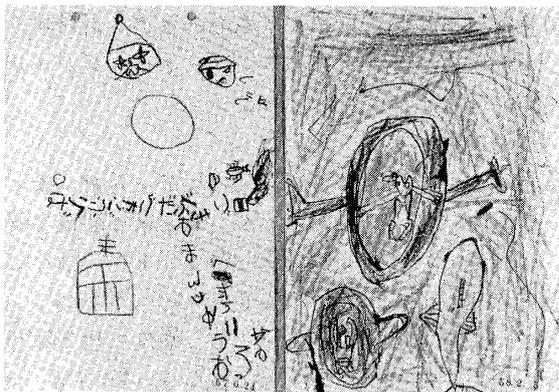
右下の写真は、同じ幼児の6月と2月の竹ペンによるクロッキーであるが、6月には、まだ観察するというよりも概念化された人間として描いていたものが8ヶ月足らずのうちに大変上達した例である。

6. 物語の絵について

3歳児；話し方の一致を討る為、テープによって物語を聞かせたので、まず静かに話を聞かせることから始めなければならなかった。作品に関しては殆どが登場人物、あるいは登場した物をひとつひとつ描き、それで満足している者、また、話に全く関係のない物を描く者すらいた。しかし、回を重ねるにつれ、その様な者が減り、だんだんとある場面を描く者が多くなってきた。また、情景のわかる程ではないにせよ、それらしく表現しようと努力している姿も見られるようになってきた。

4歳児；羅列画に近い絵を描いていたのが、次第に周囲の状況に目を向けられる様になり、中には物語の一場面を状況がわかる様に描く者も出て来た。

5歳児；3歳4歳に比べると、内容をとらえて物語を聞き、一場面を絵にすることが出来る様である。しかし、初めは道確な表現が出来ずとにかく画面に何かを描いたという者や、線も迷いながら描いている者が多かったようである。それが回を重ねるにつれ、自信のある線で、代表的な場面のみにとらわれることなく、楽しそうに最も印象深かった場面を表現する様になってきた。



上の写真は、描画をあまり好まなかった5歳児が物語を聞いて絵を描いた例である。左は、6月に描いた「豆つぶコロコロ」の絵、右は、2月に描いた「カチカチ山」の絵である。初めは、どう描いているのかわからず、知っている字を並べてなんとかそれらしくしようと苦心しているのに対し、右の絵では、とても楽しそうに画面一杯に、状況のよくわかる場面が描けている。

4. おわりに

今回は、まだ試行錯誤の段階であり、また、短期間の指導では結論づけることは出来にくい。しかし、技術的指導をした方が、しないよりは良い様である。クロッキーをさせたグループでは、事物をより細かく観察しようとする態度が見られる様になり、それが自信のある線となって表われてきた様である。年長児の中には、線の濃淡まで使い分けようと試みたり関節の動きまで自然に描くことが出来る様になった者も増えてきた。また、物語の絵を描いたグループでは、話を聞く態度が養われイメージの広がりも早くなってきた様だ。即ち、話の内容によく合った表現で、細かい所にも気を配りながら短時間に力強く描く様になり、描画が楽しいと言う者が増えてきた。また、年長児の中には、遠近を考えて表現する者も出て来た。しかし、幼児が絵を描く場合、これらの技術をいつも応用出来る迄には至っていない様である。さらに、技術の応用というパイプラインを見つけ出すことが出来れば、もっと顕著に幼児の内に秘められた意欲を表出出来たかもしれないが、むしろこれが幼児の発達の本来の姿であると考えべきなのかもしれない。また、絵画表現は技術指導だけで豊かになるのではなく、勿論、才能や環境にも大きく左右されると思われる。幼稚園でも家庭でも環境に配慮し、言葉かけにも気を配らなければいけない。今回の研究過程においても、同じ助言、よく似た環境を整えたつもりでも、保育者の絵画的センス、知識、とらえ方等により、総合的な差が認められた。特に年少児になる程、それがはっきりしている様である。あらゆる条件と幼児の意欲がうまくかみ合っこそ、感動的な絵が生まれる。その一つの条件として、今回の研究を取り上げたわけであるが、数学的なはっきりしたデータを発表出来る迄には至らなかったものの、実際にクロッキーや物語の絵を描かせてみて、その発達の様子に幼児の底知れぬ力を改めてまたひとつ発見し、認識させられたという実感が残った。そして、新しい世代の幼児に対して、一般論では片付けることなくどんな欲求にも応じられる指導力を養うことが大切であり、新しい試みも必要であると痛感した。今後は、実験群と統制群をよりはっきりさせ、科学的な方法でデータ化したものを発表出来る様に、研究を続けたい。